

野に仏・里に仏

大谷 眞

最後の旅・その三・最終回

運命の日、新雪の中での結願

1995年1月17日

雨のち雪、夕刻から曇り

目が覚めたら4時。布団の外にはい出し、暖房を入れ、また布団にもぐりこんで、うとうととした。5時の目覚ましで起床。寝ぼけまなこで荷物を片付けていると、突然、ぐらぐらと来た。かなり大きい。一瞬、いろんなことが頭を駆け抜けた。でも体は動かない。揺れはしばらく続き、やがてまた静かになった。

とりあえず、何もなくて良かった、と胸をなでおろした。テレビをつけてみると、まず火を消してください、とテロップだけが流れている。その後、各地の震度が表示された。高松で震度4、大阪震度5、神戸はしばらく表示がなかったが、そのうち震度6と出た。かなり広

範囲な地震だったようだ。

とりあえず、わが家のある大阪南部も、ここ高松と震度が同じなら、さほどの被害は無さそうだが、しかし、一番ひどい神戸の震度6とは、一体どの程度の地震だったのだろうか？この後、余震を2度ほど感じた。

6時半に宿の主人が朝食の準備を告げに来た。食堂に入ると、昨夜も同席したイガグリ頭の若い青年が軽く会釈をしてくれた。

「ほんと、たいへんだったの！ さっきの地震で台所のビン類が全部倒れて、床中びしょびしょ！」
と、汁椀をもって来られた女将さんが言う。と言うことは、もしかしてわが家も多少の被害は出ているのだろうか？
考えながら、とりあえず朝食をとった。目の前

の青年も黙々と食べている。しかし、この青年、何者だろうか？昨夜も顔を合わせたのが、特に話らしい話はしなかった。お遍路さんではないようだ。歩く人なら、独特の荒々しいほこりっぽいさがある。

私のように足の痛みをかばうしぐさもない。白衣も着ていない。ただ彼には、スポーツマンらしい力強さが感じられた。穏やかで謙虚なところはお遍路さんにも通じるころがある。それでも、歩いている人とはどこか違う・・・。そんなことを考えながら朝食をとっている内に、とうとうまた、話らしい話もせず終わってしまった。

部屋に戻る前に、宿代の清算を済ました。釣りを取りに、向かいの実家まで駆け戻って来た女将さんが、

「あの地震から雨になりましたよ。」

と教えてくれた。しかし、最後の日が雨になるとは！

部屋に戻り、荷物を作り、カップを着込んだ。玄関でも、靴を履く前に、スーパールのビニール袋を

足に履いた。この上に靴を履いた。これで多少は足からの水漏れに効果があるかもしれない。この寒さなら、蒸れることも少ないだろう。

宿を後にして、まだ薄暗い中を歩きだした。靴の中でビニール袋のせいで足がすこすこと滑る。足の痛みは今朝はましな気がした。雨はいつの間にかみぞれに変わっていた。

大窪寺への標識を追って、細い車道をひたすら歩いた。向かいからくる

車は、屋根に雪を被っている。道は少しずつ登りとなり、やがて左手にダムが見えて来た。手前の「四国の道」の休憩所で少し休むことにした。ザックを降ろすと、背当てからもうもうと湯気が立ちのぼった。これには我ながら驚いた。カッパの背中からも、同じくかちかち山のタヌキよろしく、モクモクと煙のように上がっている。

地図でこの先のルート見ると、幾つかのコースに別れていた。標識にも、車道を歩けば2時間50分

山道を歩けば1時間余分にかかるが絶景なり、とある。迷わず、山道を選んだ。

ダムをわたり、両側に石仏の続く道を進んだ。舗装が途切れるころから、雪が積もり始め、歩きたびに、きくきくと音がする。みぞれもいつの間にか雪にかわっていた。

やがて道はまた車道に出た。すぐ横手に何かの博物館だろうか、「太郎兵衛館」とある。とりあえず軒を借りて、カッパの下の汗を拭こうと、一步その方向に歩きだして気が



付いた。既にくるぶし辺りまでの新雪に、既に誰かの足跡がある。山手に向け、さらに続いていた。この雪だと、確かに車では無理だろう。しかし、歩いてこの先、誰が、どこに行くかというのだろうか？

そうか！私と同じお遍路さんかも知れない、と思いついた。しかし足跡はよく見ると、何かを引きずった跡が同じく横に続いていた。なんの跡だろう、としばらく首をひねった。いずれにせよ、この足跡からすれば、まださほど先には行っていないような気がする。休むのも忘れ、この足跡に続くことにした。

しかし、この細い跡は何なのだろう？お遍路さんが、まさか杖を引きずりながら歩いているわけでもあるまい。しばらく跡をついて歩き、はたと思いついた。自転車のわだちだ！そういえば、ところどころ、線が二つにダブっている。降り積もる雪で、タイヤの跡こそ消えてはいたが、確かに自転車をついて歩いている跡に違いない、そう思った瞬間、この人物が

昨夜同宿したあの青年であることを確信した。なぜなのか具体的には説明はできない。ただ、あの青年の精悍さと、それでいてあの謙虚な澄んだ目を思い出し、彼であることを直感した。

道はやがて、またお遍路道に分岐する所に来ていた。まっすぐ行けば車道、遍路道は横手から木の階段を登る山道となった。足跡はこの先10メートル程進み、ためらったあと、またここまですり返した痕跡がある。それから、この幅60センチ程度の山道を、意を決して登り始めた様子だ。これには驚いた。そうか、彼の自転車は、マウンテンバイクかも知れない。わだちも確かに少し太い。あの雲辺寺から、木の階段を駆け降りて来たマウンテンバイクを思い出した。

この急な坂をグングン登る。山はガスが出たのか、雪が視界を遮るのか、真っ白になってきた。メガネが汗で曇り、余計に視界が見えにくくなる。道はさらに険しさを増し、立ち木のない山のふちを

巻くように登って行く。しかし、この急な折り返しを、どうやって自転車で切り返したのだろうか？足を滑らせば、おそらくはるか下まで滑り落ちてしまっただろう。しかもこの雪だ。

この先、いったん先程の車道に合流し、さらにまた山道に入った。マウンテンバイクのわだちはさらに挑戦を続けていた。しかし、ここからが地獄となった。道はほとんど、真上によじ登る形となった。立ち木につかまりながら、足元を確かめ、一步、一步、体を持ち上げて登る。時に、雪でズルリと足もすべる。

この道では、おそらく彼は自転車を担いだに違いない。しかしこの私でさえ、両手を使わなければ、この壁はよじ登れない。自転車で旅をすれば、装備も歩く以上に増えるはずだ。その荷物と、自転車の重みを考えれば、おそらく彼は、死に物狂いでこの壁に張り付いたはずだ、そう思うと、知らず知らず、見えない彼にエールを送っていた。



頑張れ！頑張れ！

それは同時に自分への
エールでもあった。

この難所を辛うじてよ
じ登り、女体山の頂上に
たどり着いたときは、思
わずへたり込んでしまっ
た。頂上のわずかなス
ペースには小さな祠が
あった。これに手を合わ
せ、震える声でお経を詠
んだ。張り詰めていた気
持ちが一気に緩んだのか、
涙があふれそうになった。
見上げると、真っ白な空
から、あとからあとから
雪が舞い落ちてくる。そ
の様をながめながら、な

ぜかここが旅の終りのよ
うな気がした。

ここから道はまた急坂
を下った。それでも、先程
に比べればまだ穏やかと
言えた。マウンテンバイ
クの彼も、またつきなが
ら歩いた形跡がある。

やがてこの道は車道に
合流し、さらに行った所
で再び山道に別れた。先
を進む彼は、今度はあき
らめたらしい。ゆるやか
に下る車道を、バイクの
わだちだけが、新雪の中
に続いていた。

真っ白な世界を再び一
人で歩く。きくきくと、足

元が心地よい。手袋は既
にぼとぼとに濡れている
が不快感はない。煩惱の
火も消えぬまに、今、お遍
路も終わろうとしている。
せめてこの雪が、最後だ
けは身も心も真っ白に染
め上げてくれたのかもし
れない。

道はグングンと高度を
下げる。途中の展望休憩
所から、木々通して、はる
か下方に大窪寺の甍が白
くかすんでいた。道々に
お遍路の標識が、降り積
もった木々に幾枚も下
がっていた。「結願」とだ
け書かれた文字に、歩き

遍路の喜びがにじんできた。下り切って、第八十八番結願寺大窪寺の境内に入る。

「昼近いというのに境内はまるで人影がない。この雪なら、確かに車で参拝は難しいのだろう。本堂で一人ゆっくりとお経を上げる。涙はない。深く静かな充足感だけがあった。

「先程、同じく若い人がこられましたよ。」

納経所で記帳しながら、係りの人が教えてくれた。「30分ほど前に、これから1番さんに向かう、と言って帰られました。」

「その人、自転車に乗ってたでしょう?」

「ええ、そのようでした。が……。」

そこで、先程までの彼の苦闘を話すと、

「へええ!」

と感心された。そうか、やはり彼だったのか、と嬉しかった。彼は今日、一番さんに打ち戻り、長いお遍路を終えるのだろう。

ここから靈山寺まで雪の中を歩く。大窪寺からは40キロ以上もの距離と

なるので、途中「白鳥温泉」に宿を取ることにした。町営のクアハウスのような趣だった。

受付で手続きをしながら、

「お遍路さん、どちらからですか?」

と聞かれ、大阪、と答える

「お家に電話されましたか?」

と言う。えっ?と驚くと、

「地震ですよ。大変な被害が出ていますよ。」

ロビーにあるテレビに目を移すと、無残にも崩壊した神戸の街が写し出されていた。モクモクと黒い煙が空を覆っている。慌てて自宅に電話するが、妻は留守だった。京都の母親にも連絡を入れたが、こちらは大丈夫とのこと。妻からも母に電話があった。それで、わが家も直接の被害はなかったようだ。

少しほっとする。でも神戸近辺の友人たちは大丈夫なのだろうか? 4時から宿泊客は入室

との事だったが、受付の好意ですぐにキーを渡してくれた。とにかくまずは風呂に入る。広いガラ

い冬の谷あいの自然を、お湯の中からゆったりと眺めた。神戸での惨禍とは、あまりにも対照的な風景だった。

1月18日 晴れ

6時半宿を出た。雪は昨日の午後、既にながった。その溶けた雪が地面を凍らせていた。西の空がうつすらと赤い。

9時前、四国八十八カ所霊場の奥の院と言われる「興田寺」でお参りを済ませ、ここでやっとわが家に連絡がとれた。食器棚から中身が飛び出そうとするのを、必死で扉を押さえていた、と妻はいう。

興田寺から標識がわかりにくくなった。せめて最後の日は、自然の多い所を歩きたいとの気持ちで「四国の道」を選んだのだが、道を尋ねる人にも人家にも出会わず、迷いに迷って、たまりかねて途中から車道を歩くことにした。

大坂峠を越え、ダンブカーが行き交う道を延々と下る。時計を見ると、なんとか靈山寺へは5時までに間に合いそうな気が



した。そう思うとつい足も速くなった。途中一度道をたずね、金泉寺の前を通過したのが4時前。ここからは、一年前、1番から歩き出した同じ遍路道だ。ただ、今はその逆をたどっている。

なつかしさが込み上げてくる。一つ一つ写真に撮った所が、思い起こされる。夕刻の日差しもあの時と同じだ。写真におさえた昔ながらのタバコ屋も、飾り付けこそ替わったが、相変わらずだ。廃屋の前でひとりたたずんでいた犬は、今日は小

さな子犬に囲まれていた。どう持てば様になるかと考えながら歩いた杖も、いまでは10センチ以上も短くなった・・・。

4時半近くになって、やっと行く手に靈山寺の五重の塔が見えた。1年前と同じように、山門をくぐる。境内の隅にあった灯籠にザックを預けた。中から取り出した白衣をカッパと着替えた。本堂に進み、お賽銭を投げ入れると、そばの婦人が鐘をひとつ、ごーんと叩いてくれた。そうだ、1年前もそうだった。

いつものように「般若心経」をゆっくりと読み始めると、突然胸にこみあげるものがある。結願寺「大窪寺」では、淡々と詠めたお経が、急に胸がつかえ、声が震えた。これには我ながら、予想だにできなかっただけ驚いた。何事にも、その意識の底では、常に白けている自分を見ていただけに、少なからずうるたえた。涙が溢れそうになるのをこらえながら、つつかえつつかえ最後まで詠んだ。大師堂で今度は最後の「般若心経」を詠んだ。今

度はこらえ切れず、ぼろぼろと涙が落ちた。夕刻既に人影も少なく、それを良いことに、そのまま詠み続けた。歩き通せた、という安堵の念と、ここまで守ってくれたお大師さんへの心からの感謝の涙だった。

一介の「遍路もどき」の私を通して、各地で出会った人々は、「お大師さん」を見てくれた。私にはまた、その心にこそ、「お大師さん」そのものを見た。お互いにとつての「お大師さん」は、旅の先々に常に共にあり、陰になり日向となつて、共に歩き続けてくれた。こうして、

この四国で人は癒され、その癒された人に、また人は癒される。善意の輪は永遠の輪となり、人は人を癒し続けるのだ……。最後までお経を読み上げ、これほど、謙虚に祈れたのは初めて最後かも知れない、と思つた。それから、もう一度、歩き通せた事を心から感謝して手を合わせた。

白衣はきちんとたたみ、輪げさを丸め、ずだ袋と共に大切にザックに収めた。旅の間、苦行を支えてくれた杖は、これからも心の杖となつてくれるだろう。

日は西の空に沈み始め、辺りには夕刻の穏やかな光が満ちていた。山門を出る前、もう一度本堂とお大師堂に手を合わせ、霊山寺を後にした。何も具體的なものを手に入れた訳ではない。ただ、これからは、自分に正直に生きることこそ一番なのだ、そう、心から思つた。

駅への道は穏やかな思い出だけが溢れていた。

納経所で記帳を終え、ザックのところまで戻り、ゆっくりと衣装を解いた。